

文法にみられるレアリア

朝妻 恵里子

キーワード：レアリア，単数・複数，主語，実物教材，プラハ言語学サークル

1. はじめに：レアリアとは

「レアリア」といえば，千野栄一が『外国語上達法』のなかで，最後の一章を費やし，「レアリア——文化・歴史を知らない…」と題してその重要性を論じたのが思い出される．これによれば，「レアリア」はラテン語由来の語であるが，多くの言語にみうけられる．しかし，それが指す内容は言語によって若干異なるという．たとえば，英語の *realia* やドイツ語の *Realien* は，「実物教材」，「事実，実体」などという日本語の訳語が与えられていることから「モノ」を指していることが察せられる．一方，チェコ語の *reálie* やポーランド語の *realia* は「ある時期の生活や文芸作品などに特徴的な細かい事実や具体的なデータ」と英語やドイツ語のそれに比べるとより広い意味で定義されている（千野 1986：183）．そこで千野は，チェコの言語学者マテジウスによって 1935 年から 36 年に書かれた『マテジウスの英語入門——対照言語学の方法』の最終章「イギリスの現実とチェコの現実」を引用し，マテジウスが「レアリア」を単なる「実物教材」と捉えたのではなく，文化，思考様式までを含めた一層広い意味で用い，そしていかに重視していたかを示している．

マテジウスによる「お茶」をめぐるレアリアの例を挙げよう（マテジウス 1986：131）．この言葉で理解される内容は，イギリスとチェコではずいぶん異なるという．イギリスのお茶は，インドやセイロン産を大量に入れた濃いこげ茶の液体で，ミルクを入れて飲むものであるのに対し，チェコのお茶は，中国やロシア産のお茶を少しだけこした金色の液体で，砂糖を入れてそのまま飲むか，あるいはコニャックなどを入れて飲むものである．マテジウスは，一見，同じ物を表す語でも実体は異なる例をいくつか挙げ，外国語学習の際には単語の意味だけを覚えるだけでは不十分で，その語のもつ中味，内容までを把握する必要性を説いている．

マテジウスの例は，さらにイギリスとチェコの不動産の権利の違いや，小学校や中学校の教育体系の違いに及び，その言語を話す民族の文化的，社会的背景や生活，思考様式まで幅広く含めた知識を「レアリア」としている．

本稿では，千野，マテジウスにならって「レアリア」を広く捉え，語彙レベルに留まらず，文法や思考様式のなかにみられるレアリアというものについて考える．その際，ロシア語を学ぶ日本人がその学習過程で経験する戸惑いや誤りを考察する．日本語とロシア語という系統的にもかけ離れた言語の学習においては，文法書から得た知識をただ暗記する

だけでは充分でなく、与えられたコンテキストで実際に書いたり、話したりといった運用をしてみてもじめて体得できるところがある。これをレアリアの一つとして考えてみたい。

2. 名詞の単数・複数形のレアリア

まず、初級文法のなかでも早い段階で登場する名詞の単数形と複数形の区別についてみる。日本語には、単数・複数の区別がない。これは世界の言語のなかでもかなり稀な現象といえる。一方のロシア語にはもちろん単複の区別があり、ロシア語母語話者に、日本語には複数形がないことを話すと、それで生活に支障はないのかと驚かれるほどである。日本の学習者の場合、大半の人が英語の学習経験があるおかげで、ロシア語の名詞の複数形の概念が理解できずに、習得を早々に挫折するというケースはまずない。ロシア語には複数形があると聞いて驚く学習者もいない。しかし、ロシア語を実際に書かしてみると、初級文法をすでに終えた学習者でさえ、明らかに複数形が想定される文脈でも、なかなか複数形で書くことができない。たとえば、「学生たちは図書館で本を読みます。」といった文を作文させると、多くの学習者が **Студенты читают книгу в библиотеке.** と「本」を単数形で書く。「学生たち」は「たち」と明示してあるせいか複数形で書くことができ、その人称に合わせて動詞も三人称複数形にすることもできるのに、「本」を複数形にできていないことが多くみうけられる。学生たち複数で一冊の本を読んでいるのかと指摘すれば、すぐに直すことができるため、ロシア語には単数形と複数形の区別があることは理解できている、受け入れてもいるのに、実際の運用になると実践できないようである。

当然、日本語を知っているロシア人でも同じことが起こる。あるロシア人が、日本語で「今日はお客がきます」と言われて、一人のお客だと思っていたら、ぞろぞろたくさんのお客が来て驚いたという話を聞いたことがある。

こうした例は、ロシア語に単数・複数の区別がある、あるいは日本語にその区別がないという知識は持っていながらも、実際のコンテキストにおかれると、その記号が実際に運用されるときのあるべき姿をつかめていないことを示している。つまり、ロシア語、日本語のそれぞれの名詞に対するレアリアまでは獲得できていない。

3. 主語に関するレアリア

次に、日本語話者の主語に対する曖昧な意識がもたらすロシア語の誤りを考察する。ロシア語文法における「無人称文」と呼ばれる事項に日本の学習者は多少苦勞する。たとえば、「わたしは寒い。」 **Мне холодно.** という気温・気候などをあらわす文では、ロシア語では一切の主語をたてない。英語であれば、**it** という形式主語をたてて、**It is cold for me.** と表現するが、ロシア語では主語なしで表現し、意味上の主語をあらわす場合は与格を用いる。一見、非常に単純な文構造のように見えるが、学習者はこの構文に戸惑う傾向がある。日本語話者には、***Я холодна.** のように、「わたし」を主格にたてる誤った作文がし

ばしばみうけられる。同じように、無人称文「モスクワは寒いです。」 В Москве холодно. のような文になると、学習者はますます *Москва холодно や *Москва холодна. と
いった誤った文を書く向きがある。

これは、日本語をそのままロシア語に当てはめて翻訳することから生じる誤りだと考えられる。日本語では「わたしは寒い」というとき、「わたし」という主語を明示していると錯覚されがちであるが、「わたしは」の「は」はこの場合、主語ではない。日本語の「は」は、主語の役割を果たす場合と、同時に、主題、つまり「トピック・マーカ」の役割を果たす場合とがある。これが日本語話者の主語に対する感覚の曖昧さを引き起こしている。たとえば、「太郎は鰻を食べました。」というように、「は」が主語、つまり「サブジェクト・マーカ」の機能を担う場合と、「鰻は太郎が食べました。」のように、主語でなく、「トピック・マーカ」となる場合がある。日本語の「は」という一つの助詞には、こうした主語と主題といった二つの機能の重複がある。このことが日本語話者に主語の概念を曖昧にさせている。

そのため、「モスクワは寒いです。」のロシア語訳で、日本語話者は、「モスクワ」を主語にたてる誤りに陥りやすい。同様に、「わたしはロシア語を話すのが難しいです。」 Мне трудно говорить по-русски. も日本語に影響されて、「わたし」を主格でたてた誤った文章を作ってしまう。英語ではいわゆる *it ...to* 構文をとり、学習者の多くが **I am difficult to speak Russian.* とは言えないことを知っているのに、ロシア語で書かせると誤用がみられる。「わたし」が「むずかしい」というイコール関係ではないことを指摘すれば、理解はできるが、なかなか定着しない。

また、「うれしい」という意味の рад と「心地よい」などと訳される приятно は、рад のほうは主語に主格を、приятно のほうは、主格をとれず、意味上の主語として与格を用いる。したがって、「お会いできてうれしい」という表現は、рад を用いれば、Я рада вас видеть であり、приятно を用いれば、Мне приятно вас видеть.となる。ところが、рад と приятно を「うれしい」と「心地よい」と日本語で考えると、両者には意味の差がさほどないために、приятно に主格が用いられないことを忘れてしまう。

このように、間違いの多くは、学習者が日本語で考えて、それを直接ロシア語に移そうとすることから生じると考えられ、習得言語の文法レアリアまでは得られていないことがわかる。

他方で、同じ無人称文でも日本語話者に容易に理解されるロシア語の構文もある。たとえば、Мне не хочется работать. 「わたしは働きたくない気がする。」という文である。Я не хочу работать. と主格を用いてより直接的に「わたしは働きたくない。」表現することも可能だが、無人称文を用いて表現すると、本人の意志とは離れたところで、無意識的に「働きたくない気がする」といった婉曲的なニュアンスが加わる。

ベルジチェフスキイらは、ロシア人が無人称文や受動態文を好むのは、ロシア民族のも

つ運命論的、非合理主義的といった特有のメンタリティが文法に影響しているからだ指摘している（Бердичевский 2011: 49）。この指摘が正しいかどうかは議論しないが、こうした曖昧性をともなった婉曲表現は日本語でも好まれる。たとえば、主語を意図的に明示しないで、「～だと思われる」といった表現は一つのレトリックとして存在する。あるいは、こうした婉曲表現は代名詞にもみうけられる。ロシア語で **вы**、日本語で「あなた」にあたる語は、ヨーロッパの言語では使用頻度のもっとも高い代名詞の一つであるが、日本語では相手に面と向かって「あなた」と呼びかけることはそう多くない。ましてや先生などの目上の人にむかって「あなた」と呼ぶことはまずない。日本語では、学生は教師のことを、直示的な二人称の表現「あなた」とは呼ばず、「先生」という遠回しな三人称を用いることで、敬意をあらわす。

このように、日本語はロシア語にまして直接的な表現を好まず、主語をぼかしたり、三人称を用いたり婉曲表現が多く用いられる言語である。この点では、ロシア語の無人称文によってあらわされる婉曲性と一致しており、学習者にも受け入れやすい事項である。

ところが、ヨーロッパ言語の話者にとっては、ロシア語のこうした無人称文に違和感を抱くという指摘がある。オーストリア人がロシア人に「ディスコに行かない？」と誘ったところ、**Что-то не хочется**「なんだか行く気がしない」というロシア語の答えに戸惑いを感じたという例が先のベルジチェフスキイにある（Бердичевский 2011: 60）。こうした表現は日本人にはなじみのあるものではないだろうか。

4. 比較から運用へ

このように、無人称文でも、日本語話者にとって受け入れにくいものと受け入れやすいものがある。これは、学習者がロシア語を日本語との比較で考えているためである。

初学者が文法を母語の文法との比較で学習するのは当然であるが、比較したあとのステップをいかに進めていくかが重要である。ベルジチェフスキイは、異文化事象を受け入れる際に学習者が経る5つのプロセスを紹介している（Бердичевский 2011: 53）。1. 新しい事象の吸収、2. その理解、3. 自文化との比較、4. 自他相互の分析、5. 新しい知識をともなった行動の5段階である。この5段階は外国語習得にも当てはまる。これまで見てきたように、学習者はロシア語の単数・複数の区別や、無人称文などは、日本語とは違うという比較・分析まではできている。ところが、最後の5段階目の「行動」、すなわち、実際の言語運用になると、実践できない。ここに習得の大きな壁がある。

ここを乗り越えるためには、当然、その言語を大いに使うことが最善策であるが、いつもその機会があるわけではない。そこで、狭義でのレアリア、つまり実物教材が有益であろう。食品のパッケージ、スーパーなどの広告、レストラン・カフェのメニュー、店や公的機関のアンケート用紙、さらには、テレビやインターネットの動画、映画、あるいは雑誌や文学作品などを教材として用いれば、ネイティブの言語運用の場面に接することがで

きる。たとえば、ロシア語の **Я не скажу**. という独特の言い回しがある。直訳すれば、「わたしは言わない」となるが、コンテキストによっては、完了体の未来形の「不可能」をあらわす用法で「わかりません」といった意味にもなり、日常で多用されている。学習者は完了体の未来形の用法としてこの用法を教科書で学んだことがあっても、実践の場になると、その知識を取り出せない。しかし、こうした場面を映画や文学作品などで一度経験すると、すんなり理解できる文法事項になる。実物教材を用いることで、机上で得た知識が実経験としてより強固なものになる。

本稿では、文法習得に必要な運用経験という面からレアリアを論じたが、それには狭義のレアリアである「実物教材」が補助的な役割をはたすことを最後に触れた。しかしレアリアが広義か狭義かのいずれに解釈されようとも、言語習得において何より大切なのは、文法書や既成の会話集から知識を得るだけでなく、言語と現実世界との接点を見いだし、言語が実際に運用されている場に加わることであろう。

5. おわりに：プラハ言語学サークルとレアリア

現代の言語学では、対象物そのものやコンテキスト、話し手・聞き手の経験など言語外的な要素をも含めて分析をするのは、語用論や意味論、認知言語学などの分野では自明のことになっている。しかし、ソシュール『一般言語学講義』が出版された 20 世紀初頭では、言語記号はシニフィアンとシニフィエの完全な一体性からなることが説かれ、そこに実際の「モノ」や「対象」、あるいは言語が運用されるコンテキストが入り込むことは受け入れられなかった。

本稿冒頭で引用したマテジウスは、こうした見解に疑問を呈し、1926 年にプラハ言語学サークルを立ち上げた。このサークルの主要な功績の一つが、言語活動に基づいた言語の機能分析である。テーゼには「言語の研究は、個々の場合におけるさまざまな言語機能とその実現の形式が、厳密に考慮されることを必要とする。これを考慮しなければ、共時的であれ通時的であれ、どのような言語の特性を明らかにしようとしても、必然的に歪曲され、かなりの程度、虚構のものとなる (Thèses 1929: 14).」と明言される。言語を閉じた体系として記述するのではなく、言語が使用される場面ごと記述すべきという考えである。「レアリア」という言葉がチェコでより広い意味で捉えられているのは、マテジウスらのプラハ言語学サークルの主張がこの地で継承されてきた証であるかもしれない。

参考文献

千野栄一（1986）『外国語上達法』岩波新書.

マテジウス（1986）『マテジウスの英語入門——対照言語学の方法』（千野栄一，山本富啓訳）三省堂.

А. Л. Бердичевский, И. А. Гиниатуллин, И. П. Лысакова, Е. И. Пассов (2011),
«Методика межкультурного образования средствами русского языка как
иностранного»

“Thèses” (1929) *Travaux du Cercle Linguistique de Prague*, vol.1, pp.3-29. (Repr.
in J. Vachek (ed.), (1964) *A Prague School Reader in Linguistics*, pp. 33-58.)